

フランス語における Putain の間投詞的意味機能に関する考察

楊 鶴

1. はじめに

フランス語の下品な言葉には、主に猥亵的表現、性的表現、または糞尿表現が多く含まれており、一般庶民によって使用される (Guiraud 1976,¹⁾ Mateiu & Florea 2014²⁾)。フランス語話し言葉に見られる putain は一般的に *gros mots* (下品な言葉) として認識されているが、この *gros mots* は、辞書記述によると «juron grossier (cf. Gros mots)»³⁾ (罵り言葉、下品な言葉) または «mot obscène»⁴⁾ (淫らな言葉) を指す表現である。つまり、putain は *gros mots* (下品な言葉) であるだけではなく、*juron* (罵り言葉) としても捉えることができる。

フランス語には「罵り」を表す用語が多く存在する。⁵⁾ それぞれの用語を明確に定義することは容易ではないが、多くの研究において、*insulte* (侮辱、冒涜) / *injure* (悪口、侮辱な言葉) / *juron* (罵りの言葉) を区別している (Guiraud 1976, Larguèche 1983, 1997, 2009, Rouayrenc 1998, Lagorrette & Larrivée 2004, Anscombe 2009, Lagorrette 2012)。これらの研究によると、*insulte* と *injure* にあたる発話には発話対象 (罵り対象) が存在し、その対象に向かって罵倒する行為である。一方、*juron* にあたる発話には発話対象が存在せず、発話は発話者自身と関わりを持つ。Larguèche (1983) によれば、「*juron* は一般的に叫びに近いものであり、文法的には間投詞に分類することができる」。⁶⁾ この点を踏まえて言えば、putain はある事態に対する発話反応として使用することができ、間投詞としての振る舞いがあるといえる。本稿の目的は、間投詞的に用いられる putain の発話状況や putain が発話にもたらす意味効果の特徴を検討することである。

2. Putain の用法

Putain の間投詞的用法の考察に入る前に、putain の代表的な用法を見ていく。

(1) Le long des grilles du Luxembourg, je rencontre aussi, tous les soirs, une petite putain, peinte et poudrée.

(*Le Grand Robert de la langue française* 2001)

(リュクサンブル公園の格子沿いで、私は毎晩、おめかしをした可愛い娼婦とも出会う。)

(2) Tu es parti ; tu veux me laisser. Fils de putain !

(*Le Grand troupeau* 1931)

(行ってしまったのね、私をここに残したいのね。売春婦の息子！ (=このくそ野郎！))

(1) と (2) において、putain は「売春婦」を意味する。(1) の putain は「売春婦」という職業を指す名詞

であり、職業名詞としても捉えられる。しかし、一般的な職業（医師、会社員、教員など）に比べて社会的地位が低く、普通は忌避される職業であるため、下品や不潔といったマイナスイメージをもたらす。(2) では、*fils de putain* という慣用表現の形で使用されており、「売春婦の息子」の意であるが、下線部で示したように「このくそ野郎」と解釈する方がより適切であり、相手に対する罵りを表す。この場合、相手を「売春婦の息子」に喩え罵倒することで、相手を侮辱し、人間としての価値を蔑んだ表現となる。

(3) BT17 : on parle français quand même... putain je me suis niq- je me suis niqué au foot hier je me suis
fait mal
(ESLO2_ENT_1017)
(それでもフランス語を話す…くそっ、昨日サッカーでやってしまったよ、痛めたよ)

しかし、(3) の *putain* は「売春婦」の意で解釈することはできない。(3) では、発話者は会話の途中で突然の痛みに襲われ *putain* と発話しているため、「痛み」という突発事態に対する反応として解釈すべきである。このように、*putain* は文の構成要素に含まれず単独で使用することができ、発話をより表現豊かなものにしている。*Putain* の間投詞的用法に関しては、これまでの研究においても指摘してきたもの（Larguèche 1983, 1997, Rouayrenc 1998, Anscombe 2009）、どのような状況に対して発話されるのか、また発話にどのような意味効果をもたらすのかといった *putain* の意味分析には至っていない。本稿は、(3) のような間投詞的振る舞いを持つ *putain* に注目し、発話状況や意味解釈を考察する。また、*putain* の特徴をより明確に示すため、同じく下品な言葉であり、間投詞としても機能する *merde* との比較を行う。

3. Putain の間投詞的用法

フランス語書き言葉コーパス (Frantext) とフランス語話し言葉コーパス (ESLO) でそれぞれ *putain* を検索した。⁷⁾ フランス語の文学作品が多く収録されている Frantext では、(1) で示した名詞的用法と (3) で示した間投詞的用法が見られた。一方で、ESLOにおいては、ほとんどの用例が間投詞的用法であり、名詞的用法（売春婦の意）の用例は確認できなかった。

ここで間投詞 (les interjections) の定義を見ていく。間投詞は、発話に見られる一種の叫びであり、発話者の考え方や警告、呼びかけなどを表す言葉である (Le bon usage 1975)。また、Riegel, Pellat et Rioul (2015) は、間投詞は形が短く、一語文のように単独で使用することができ、文のさまざまな位置挿入ができると述べ、⁸⁾ さらに、間投詞の種類として、nom : attention ! (名詞 : 危ない！)、verbe : dis ! tiens ! (動詞 : ね ! ほら !)、adjectif : bon ! (形容詞 : よし !)、terme de salutation : bonjour ! (挨拶表現 : こんにちは !)、juron : flûte ! (罵り言葉 : ちくしょう !) などを挙げており、また意味的には、valeur expressive ou émotive (感情的意味)、valeur injonctive (命令的意味)、valeur phatique (話しかけ機能)、valeur interrogative (疑問的意味) などが見られると記述している。これらの指摘を踏まえて、*putain* の用例を考察する。⁹⁾

- (4) LG356 : putain c'est ce qu'on a fait ! (ESLO2_CINE_1187)
 (なんと私たちがやったやつだ！)
- (5) UI19 : pour sept cents euros tu as putain la moitié de cette pièce quoi (ESLO2_ENT_1019)
 ((家賃) 700 ユーロだとこの部屋の半分しか（借りられ）ないよ)
- (6) ch_PP6 : tu l'a vu à la fin ? c'est horrible putain (ESLO2_ENT_1038)
 (最後見た？ひどいよね、まったくだよ)

(4)、(5)、(6) は **putain** の出現位置を示しており、**putain** は文の構成要素としてではなく単独で使用することができ、文頭、文中、文末に置くことができる。また、(4) では、相手が同じく言語学を勉強していること、(5) では、パリの家賃が高いこと、(6) では、ドラマの結末が予想外だったことに対して反応を見せ、**putain** の発話を伴うことで驚きや残念などといった発話者の心情が現れる。つまり、**putain** は感情的意味を持つ間投詞であると考えることができる。

このような場合において、**putain** ではなく、**ah!**（あっ！）と発話することも可能だが、**ah!** は一種の「叫び声」（朝倉 2002, p.269）であり、単なる発見や物事に対する気づきを表す。それに対して、**putain** という発話は同様に「気づき」ではあるが、単なる気づきではなく、より感情的で発話者の戸惑い、喜び、驚き、困惑、絶望などの心情が感じられる発話である。¹⁰⁾

本稿では、**putain** の間投詞的用法を考察したところ、「発話者に関わる **putain**」と「事態に関わる **putain**」の 2 種類に分類することができた。

3. 1. 発話者に関わる **putain**

ある事態が起きた際、発話者は何らかの反応を見せてることでその事態と関わりを持つ。発話者に関わる **putain** では、発話者が直面している事態が自身になんらかの被害をもたらす場合、または自身の行動進行を妨げる事態であると発話者が判断した場合に見られる。

- (7)=(3) BT17 : on parle français quand même... putain je me suis niq- je me suis niqué au foot hier je me suis je me suis fait mal (ESLO2_ENT_1017)
 (それでもフランス語を話す…くそっ、昨日サッカーでやってしまったよ、痛めたよ)
- (8) FH449MER : j'ai jeté son numéro de portable
 FH449PER : ah putain ben je peux pas l'appeler (ESLO2_REPAS_1266)
 (彼女の携帯番号捨てたよ)
 (うそ、じゃ電話できないじゃない)

(9) NR390AMIE : putain j'ai trouvé mes gants quoi

(ESLO2_24H_1249)

(やばっ、手袋に穴をあけちゃったよ)

(10) RF126SOE : putain j'arrive pas à remettre le bouchon

(ESLO2_REPAS_1271)

(くそっ、コルクが入らない)

(7)-(10)において、発話者は自身にとって困惑する事態に直面している。(7)では、急に痛みに襲われたという事態、(8)では、携帯番号を捨てられてしまい電話ができないという事態、(9)では、寒い日に手袋に穴を開けてしまったという事態、(10)では、ワインコルクをボトルに戻せないという事態が発話者にとって困惑事態である。発話者は身の回りで起きている事態に対して反応を見せてることで直接的にその事態と関わり、事態の「当事者」となる。当事者となった発話者は「直面している事態」を確認し、それが「自身が望む事態」であるかを瞬時に判断する。発話者が望む事態が起きていれば問題はないが、「実際に起きている事態」と「自身が望む事態」が食い違っていると発話者が気づいた時、putainの発話が見られる。つまり、putainは事態に対する単なる気づきではなく、2つの事態の食い違いに対する「気づき」であるといえる。さらにいえば、発話者は「すでに実現してしまった事態」を「自身が望む事態」に変更することができなくなり、解決策がなくなった際putainと発話するのである。

例えば、(8)では、友人に電話できることが発話者にとって良い状態であるが、携帯番号を捨てられてしまつたため、電話ができないという事態に直面している。実際に起きているのは「電話ができない事態」であり、発話者が望むのは「電話ができる事態」である。両事態の食い違いに気づき、電話ができないという動かぬ事実を前に解決策を失った発話者は、どうすることもできなくなり、困ってしまいputainと発話する。続けて発話されているje peux pas l'appeler（彼女に電話できない）という発話が、発話者にとって困惑事態であることを裏付けており、結果的にはputainという発話から発話者の怒りや嘆きといった心情が読み取れる。

事態に対する単なる発見や気づきであれば、ah！（あ！）と反応することも可能であるが、「あ！」はその事態に気づいたということのみを示し、putainがもたらす発話者の心情を表現しきれない。例えば、(10)において、発話者が直面している事態は「コルク栓を瓶に差し込めない」ことである。瓶にコルクを差し込む動作中に、発話者は自分が望む「コルクを入れるという事態」と実際に起きている「コルクが入らないという事態」の不一致に気がつき、putainと発話している。さらに、(10')でputainをahに置き換えてみると、ahは事態に対する単なる気づきを示すため、putainの発話がもたらす発話者の苛立ちや残念といった心情が表れにくい。

(10') RF126SOE : ah j'arrive pas à remettre le bouchon (あつ、コルクが入らない)

このように、発話者に関わる *putain*において、発話者は「実際に起きている事態」と「自身が望む事態」の食い違いに気がつき、実際に起きている事態が発話者にとっての困惑事態である時 *putain* の発話へつながる。

3. 2. 事態に関わる *putain*

発話者に関わる *putain*では、発話者は何らかの反応を見ることでその事態と関わりを持つと述べた。事態に関わる *putain*においても、発話者は同様に事態に対して反応を見せるが、その事態は発話者自身になんらかの被害をもたらすものではなく、発話者にとって予想外の事態である。

(11) RN166 : ah le petit lapin putain il a des grandes oreilles hein il est moche (ESLO2_REPAS_1260)

(あつうさぎ、めちゃ耳がでかい、ブサイクだね)

(12) RN166 : moi c'est les premiers que je connais qui ont jamais vu un seul James Bond quoi

BV647 : et quand j'y pense c'est pas en même pas un bout

MQ293 : ah non moi non plus hein

RN166 : sérieux ? putain j'ai toute la collection je vais devoir vous la prêter

(ESLO2_REPAS_1260)

(私、ジェームズ・ボンドを1つも見たことがない人は初めて見たよ)

(そうだね、ぜんぜん見てない)

(私もだよ)

(本当？まじで私全シリーズを持っているよ、君たちに貸すべきだね)

(13) RF126SOE : elle revient encore ce week-end ?

RF126 : ouais

RF126SOE : putain elle est courageuse

(ESLO2_REPAS_1271)

(彼女、週末また帰ってくるの？)

(うん)

(まじ、がんばる子だね)

(14) WT075 : le midi euh les racailles qu'il y avait sur euh

WX414 : ah je me souviens pas

WT075 : putain mais tu as pas de mémoire quoi

(ESLO2_ENTJEUN_1233)

(お昼、不良が何人かいたじゃない)

(あ、覚えてない)

(まじで、物覚えが悪いな)

(11)-(14) では、発話者は予想外の事態に直面している。(11) では、テレビに映ったうさぎの耳が異様に大きいという事態、(12) では、友人らがジェームズ・ボンドを見たことがないという事態、(13) では、週末再び帰ってくるという事態、(14) では、相手が覚えていないという事態に対して反応を見せており、いずれも発話者にとって予想外の事態である。これらの事態は、発話者に直接的に被害を及ぼすものではないという点から、事態に関わる *putain* では、発話者は間接的に事態と関わりを持ち、自身が持つ常識や信念を基に直面している事態の性質を判断する。例えば、(11) のように、発話者は耳が大きいうさぎを見た瞬間、自分が持つうさぎの定義やイメージと比較し、「実際に見ているうさぎの耳」と「自分がイメージするうさぎの耳」が異なることに気がつく。事態に関わる *putain* においても、発話者は実際の事態と自身のイメージする事態が対立していることに気がつくことで *putain* が発話される。そして、発話者は実際に見せられているうさぎの耳の大きさを変更不可能な事実として受け止めなければならないため、いきなり突き付けられた現実は予測できなかった事態となり、結果的には驚きや信じられないといった心情が現れる。同様に、(12) では、「友達がジェームズ・ボンドを見たことがない」と「当然見たことがある」の対立、(13) では、「帰ってくる」と「帰ってくると思わなかった」の対立、(14) では、「覚えている」と「覚えていなかった」の対立であり、実際の事態と発話者の持つ常識やイメージが食い違い、それに気づくことで *putain* の発話が見られる。

さらに、Lagorrette & Larrivée (2004) によれば、*juron* タイプの間投詞にはポジティブ用法も見られる。

¹¹⁾ 以下では、*putain* の発話が事態に対する良し悪しの評価につながる用例を見ていく。

(13) ML666 : putain c'est bon ça la vache

(ESLO2_REPAS_1259)

(やばいうまい、これすごい)

(14) Philippe : Putain ... !

(Cauchemar en cuisine)¹²⁾

((すごくできの悪いデザートを目の前に) やばいな... !)

(13) は良い評価であり、おいしさが問題となっている。おいしさの度合いは人によって感じ方が異なり、少しおいしいやすくおいしいのように程度を示すことができる。しかし、発話者が直面しているのは、評価不可能な最高のおいしさである。自身のイメージしたおいしさと実際のおいしさの食い違いに気づき、

発話者はその料理のあまりのおいしさに表現する言葉が見つからず、どうしようもできなくなり **putain** の発話へとつながる。(14) は悪い評価であり、デザートのひどさを問題にしている。発話者が持つデザートのイメージは、きれいに盛り付けられたものであり、食欲をそそるものであるが、目の前に置かれたものは、全体的にクリームで覆われたひどいデザートである。発話者は自分が持つ「良い」デザートのイメージに少しでも近づけようと試みるが、どこを見ても手の施しようがない状態であり、すべて可能性を否定された発話者は、なすすべがなくなり **putain** と発話する。

ここまで用例観察を踏まえ、**putain** の間投詞的用法の発話プロセスを以下のように示すことができる。

実際の事態 P ≠ 発話者がイメージする事態 P' → 発話者の気づき ⇒ Putain !

実際の事態を P、発話者がイメージする事態を P' とする。発話者はある事態に直面し、P と P' の食い違いに気がつくことで、**putain** と発話する。加えて言えば、実際の事態を自身のイメージする事態に変更しようと試みるが、P' が P に変更されることではなく、なすすべがなくなり **putain** の発話へとつながる。

3. 3. 考察

Putain に関するこれまでの分析をより明らかにするために、同じ **juron** であり、間投詞的用法を持つ **merde** (糞、くそ) との比較を行った。**Merde** を間投詞的に用いる際の特徴としては、1) 実現すべき事態が実現しなかった場合と 2) 回避すべき事態を回避できなかった場合の 2 つの状況が見られる。¹³⁾ 2 つのパターンはいずれも実現しなかった、回避できなかったという点で発話者にとって困惑する事態であり、それが **merde** の発話につながったと考えられる。

「発話者に関わる **putain**」で考察したように、同じく発話者にとって困惑する事態に用いることができる **putain** は **merde** と置き換えることができる。¹⁴⁾

(15)=(8) FH449PER : ah putain ben je peux pas l'appeler (うそ、じゃ電話できないじゃない)

ah merde ben je peux pas l'appeler (くそっ、じゃ電話できないじゃない)

(16)=(9) NR390AMIE : putain j'ai trouvé mes gants quoi (やばっ、手袋に穴をあけちゃったよ)

merde j'ai trouvé mes gants quoi (くそっ、手袋に穴をあけちゃったよ)

一方、「事態に関わる **putain**」では、発話者にとって困惑する事態ではないため、**putain** を **merde** に置き換えることはできない。¹⁵⁾ **Merde** との置き換えを可能にするには、事態を自身にとって困惑するものとして発話者が認識する必要がある。言い換えれば、**merde** に置き換えてしまうと、文全体の意味合いが変化し、事態は予想外の事態から、発話者が困惑する事態となってしまう。

(17)=(11) RN166 : ah le petit lapin putain il a des grandes oreilles (あつうさぎ、めちゃ耳がでかい)

? ah le petit lapin merde il a des grandes oreilles (あつうさぎ、やばい、耳がでかい)

(18)=(13) RF126SOE : putain elle est courageuse (あら、がんばる子だね)

? merde elle est courageuse (くそっ、がんばる子だね)

例えば、(17) の *putain* を *merde* に置き換えると、発話者は普通のうさぎを期待していたという前提が生じ、耳が大きいうさぎだけは避けたかったけれど、結果的には避けられなかつたため、耳が大きいという事態は発話者が困惑するものとして解釈されることになる。(18) も同様に *putain* を *merde* に置き換えると、彼女の頑張りを評価する発話から、彼女がそこまで頑張れる子だと思わなかつた、彼女に週末帰られてしまうと困るといったニュアンスが出てしまう。

4.まとめ

フランス語の下品な言葉である *putain* は「売春婦」を意味する名詞であるが、現代フランス語話し言葉においてはほとんど売春婦の意で使用されることではなく、事態に対する発話者の反応を示す間投詞として用いられる。本稿は、*putain* の間投詞的用法を、「発話者に関わる *putain*」と「事態に関わる *putain*」の2つに区別した。「発話者に関わる *putain*」は、発話者が何らかの被害を受け困惑した状況にある際に発話されるものである。それに対して、「事態に関わる *putain*」は、発話者が困惑する状況ではなく、予想外の事態に直面している場合に発話されるものである。*Putain* は *ah* や *oh* のような感情を伴う間投詞と同様に、ある事態に対する気づきとして捉えることができるが、単なる気づきではなく、発話者が直面している「実際の事態」と「発話者が望む事態」の食い違いに対する気づきである。発話者はその食い違いに対してなすすべがなくただ *putain* と発話するだけであり、その結果、その *putain* という発話は困惑や驚きといった発話者の心情を表すものとして理解されることになる。

Putain の用法は本稿で挙げた2つの発話場面に限らず、口論場面にも用いられることがある。口論場面に見られる *putain* は、これまで考察した間投詞 (interjections) として機能するだけではなく、強いイントネーションを伴い単独で発話され、相手に対する応答を表す場合もあるため、感嘆詞 (exclamations) のような振る舞いも認められる。この場合、怒りの感情を伴い相手に向かって怒鳴りつけるため、罵りとしても捉えることができる。しかし、*putain* の間投詞的用法と感嘆詞的用法の区別は現時点では曖昧なままであるため、口論場面のコーパスの観察を通して、*putain* がどのように罵りと関係し、感嘆詞としても機能しているのかを今後考察していきたい。

注

¹⁾ Les gros mots « sont essentiellement des mots d'origine vulgaire (conçus et employés par le peuple) et dont la source

principale – sinon unique, en tout cas la plus riche et la plus typique – est dans l'expression de l'obscénité, principalement sexuelle et scatologique ». (Guiraud 1976, p.128)

2) Les gros mots représentent une simple classe de mots, vulgaires et bas, employés par le peuple et référant au corps et à ses fonctions (en principal la sexualité et la défécation) d'une façon qui les dévalorise. (Mateiu & Florea 2014)

3) *Le Nouveau Petit Robert de la langue française* (2008)

4) *Dictionnaire universel* (1978)

5) Insulte, injure, invective, apostrophe, vanne, juron, blasphème, gros mot, incivilité, outrage (Lagorgette & Larrivée 2004)

6) Le juron est ainsi généralement rapproché du cri, et c'est en ce sens qu'on le trouve classé, grammaticalement, parmi les interjections. (Larguèche 1983, pp.57-58)

7) Frantext は 5418 部のフランス文学作品（約 2 億 5400 万語）が収集されているフランス語書き言葉コーパスである（2019 年 9 月時点）。今回はフランス語話し言葉コーパス（ESLO）と比較するため、Frantext の検索範囲を 2008 年～2019 年とし、フランス人作家の作品に限定した。

ESLO (Enquête Sociolinguistique à Orléans) は、オルレアン大学がインターネット上に公開しているフランス語話し言葉コーパスである。1968 年から 1971 年までに収集された「ESLO1」と 2008 年から現在までに収集された「ESLO2」に区分されており、今回は ESLO2 に限定して検索した。

Putain 用例は Frantext では 179 例、ESLO2 では 176 例見られた。用例の詳細を以下の表に示す。

用法	意味解釈	Frantext (179 例)	ESLO2 (176 例)
名詞的用法 « Une putain »	売春婦の意	14	0
間投詞的用法 « Putain ! »	ちくしょうの意	96	152
« Un (une/ce/cette/son/sa...) putain de N »	N に対する価値づけ	62	7
« Putain de N ! » (Ex. Putain de connard !)	罵倒表現として	6	6
« Je me suis dit putain... » (ちくしょう！と思って...)	語りの中の putain	0	11
« Un mec va me dire putain» (男に putain と言われる)	Putain という語彙	1	0

8) Les interjections sont généralement des formes courtes, figées et invariables, qui possèdent une grande autonomie syntaxique : comme les mots-phrases, elles peuvent former un énoncé à celle seules, ou bien s'insérer dans une phrase à différentes places, sans s'intégrer à sa structure. (Riegel, Pellat et Rioul 2015, p.771)

9) Putain の用例はコーパスの記載通りに提示しているため、フランス語の文法間違いや誤字脱字が見られる。また、putain の日本語訳には統一性がなく、各用例にふさわしい日本語訳をつけている。

10) この点に関して、Larguèche (1983, p.58) は、なぜ指を挟んだ時や頭をぶつけた時に「痛っ！」、「あっ！」と発話するよりも、merde!（くそっ！）、putain!（ちくしょう！）と叫ぶのか不思議に思う。両者は明らかに同じ意味を持つとは言えないと指摘している。

11) Les emplois positifs des interjections de type juron par exemple (Putain / Bon Dieu que c'est beau, mais ? Merde que c'est beau). (Lagorgette 2004, p.6)

12) Cauchemar en cuisine (厨房の悪夢) はイギリスで放送されていた Ramsay's Kitchen Nightmares のフランス版であり、経営がうまくいかないレストランの立て直しに、有名フランス料理シェフである Philippe Etchebest さんがそれらのレストランに乗り込むテレビ番組である。料理、サービス、人間関係など、現場の問題を厳しくコーチングし、解決していくことを目的としている。

13) (a) Merde j'ai oublié de boire mon thé (ESLO2_ENT_1261)

（いけない、お茶を飲むのを忘れていた）

(b) Oh merde je l'ai trop taillé du coup y a un petit trou là (ESLO2_REPAS_1271)

（パンにバターをぬりながら）ヤバイ、伸ばしすぎて穴を開けちゃったよ

(a) では、お茶を飲まなければならなかつたが、実際は飲んでいない。つまり、実現すべき事態（お茶を飲む）が実現していない。(b) では、パンに穴をあけないことが普通であるが、実際にはあけてしまった。つまり、回避すべき事態（パンに穴をあけること）を回避できなかつた。（楊鶴 2018）

14) フランス語母語話者 18 名に対して、putain の用例を提示すると同時に音声データを聞かせる。Putain を merde に置き換えられる場合は oui (はい)、置き換えられない場合は non (いいえ) を回答するように伝えた。(15) では 18 人中 13 人、(16) では 18 人中 12 人が putain を merde に置き換え可能と回答した。

15) 置き換えテストの実施方法は上記の注 16 で述べた方法と同じである。(17) と (18) は、両用例とも 18 人中 17 人が、putain を merde に置き換え不可能と回答した。

参考文献

- Anscombe, J.-C. (2009) « Notes pour une théorie sémantique des jurons, insultes et autres exclamatives », *Les Insultes en français : de la recherche fondamentale à ses applications (linguistique, littérature, histoire, droit)*, Université de Savoie, pp.9-30.
- Furetière, A. (1978) *Dictionnaire universel*, Le Robert.
- Giono, J. (1931) *Le Grand troupeau*, Folio.
- Grevisse, M. (1975) *Le bon usage*, Gembloux (Belgique), Duculot.
- Guiraud, P. (1976) *L'argot. Que sais-je ?* PUF.
- Lagorrette, D. (2012) « Insulte, injure et diffamation : de la linguistique au code pénal ? », *Argumentation et Analyse du Discours* 8, en ligne.
- Lagorrette, D., Larrivée, P. (2004) « Introduction », *Langue Française* 144, pp.3-12.
- Larguèche, É. (1983) *L'effet injure, de la pragmatique à la psychanalyse*, Voix nouvelles en psychanalyse, PUF.
- Larguèche, É. (1997) *Injure et sexualité, le corps du délit, sociologie d'aujourd'hui*, PUF.
- Larguèche, É. (2009) *Espèce de ... ! Les lois de l'effet injure*, Université de Savoie.
- Mateiu, I., Florea, M. (2014) « Les injures et les jurons : agressions verbales vs. jeux de langage », *The Proceedings of the International Conference “Communication, Context, Interdisciplinarity”*. Section : Language and Discourse, 3, pp.594-610.
- Rey, A. (2001) *Le Grand Robert de la langue française*. 2ème édition, Le Robert.
- Rey-Debove, J. (2008) *Le Nouveau Petit Robert de la langue française*, Le Robert.
- Riegel, M., Pellat, J-C., Rioul, R. (2015) *Grammaire méthodique du français*, PUF.
- Rouayrenc, C. (1998) *Les gros mots, que sais-je ?* PUF.
- 朝倉季雄 (2002) 『新フランス文法事典』白水社
- 楊鶴 (2018) 「『Merde !』の間投詞的用法に関する研究」『ロマンス語研究』51号 pp.11-20.